

上宮聖德法王帝說

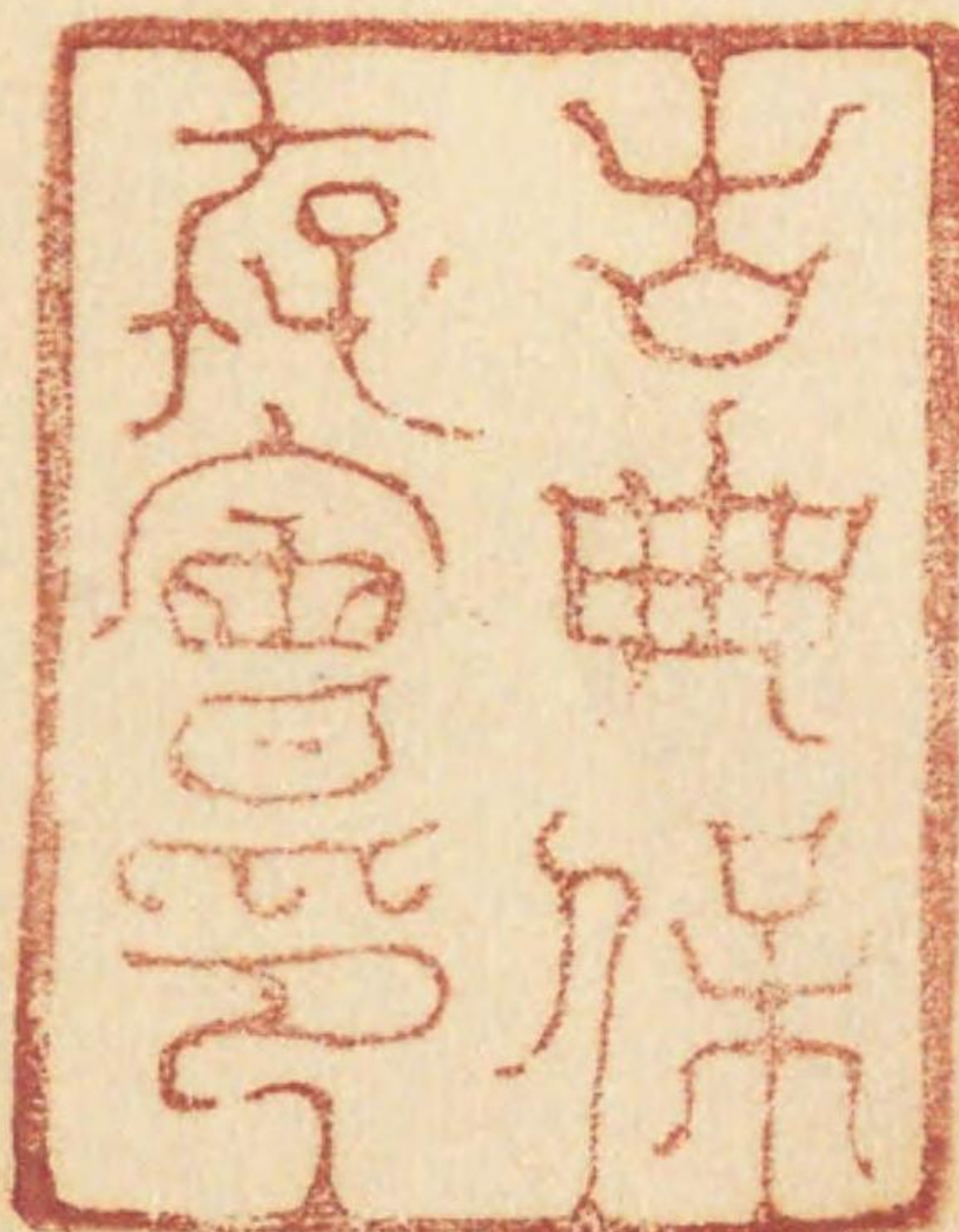
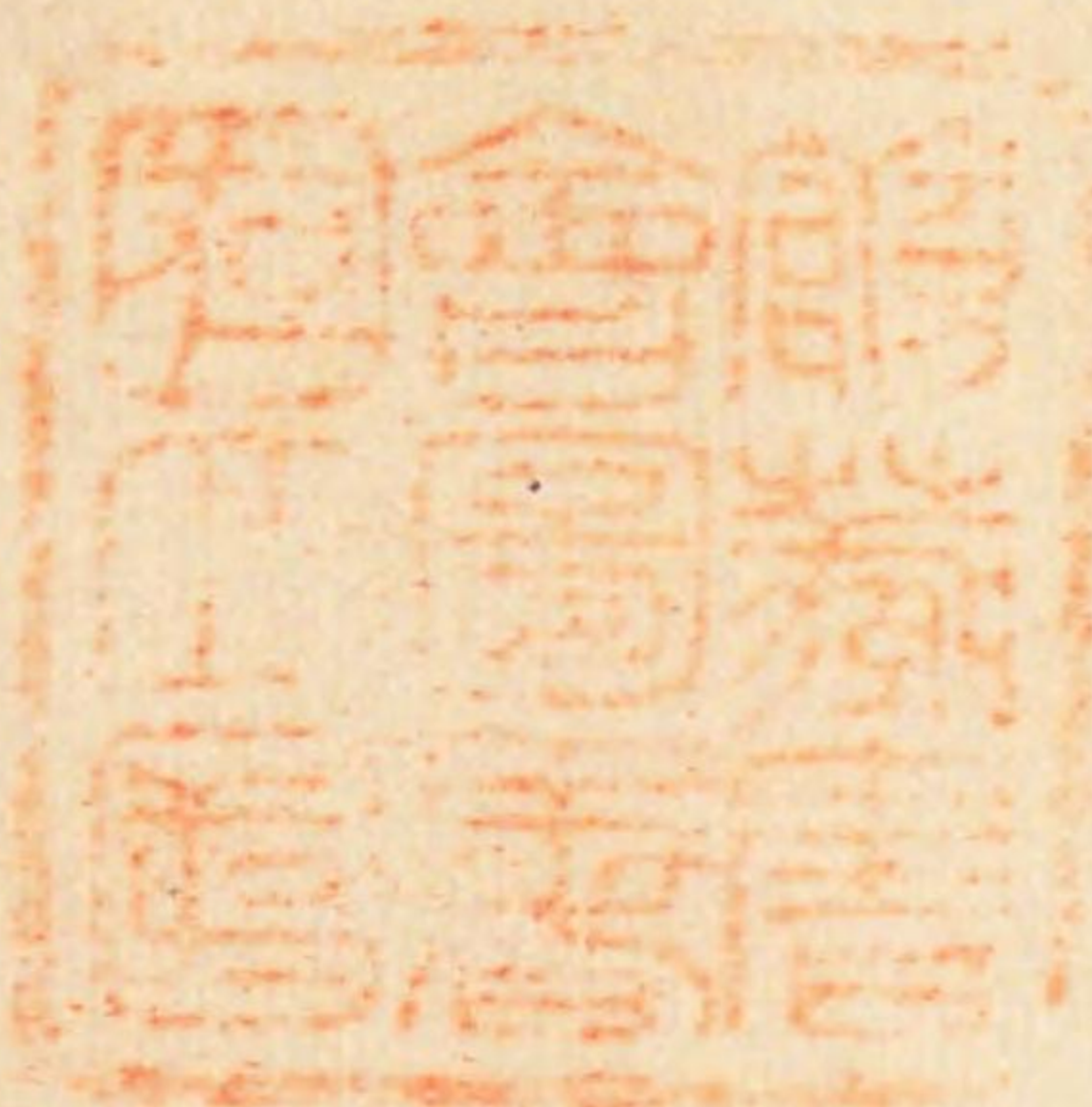
28842
Sy 9613
II

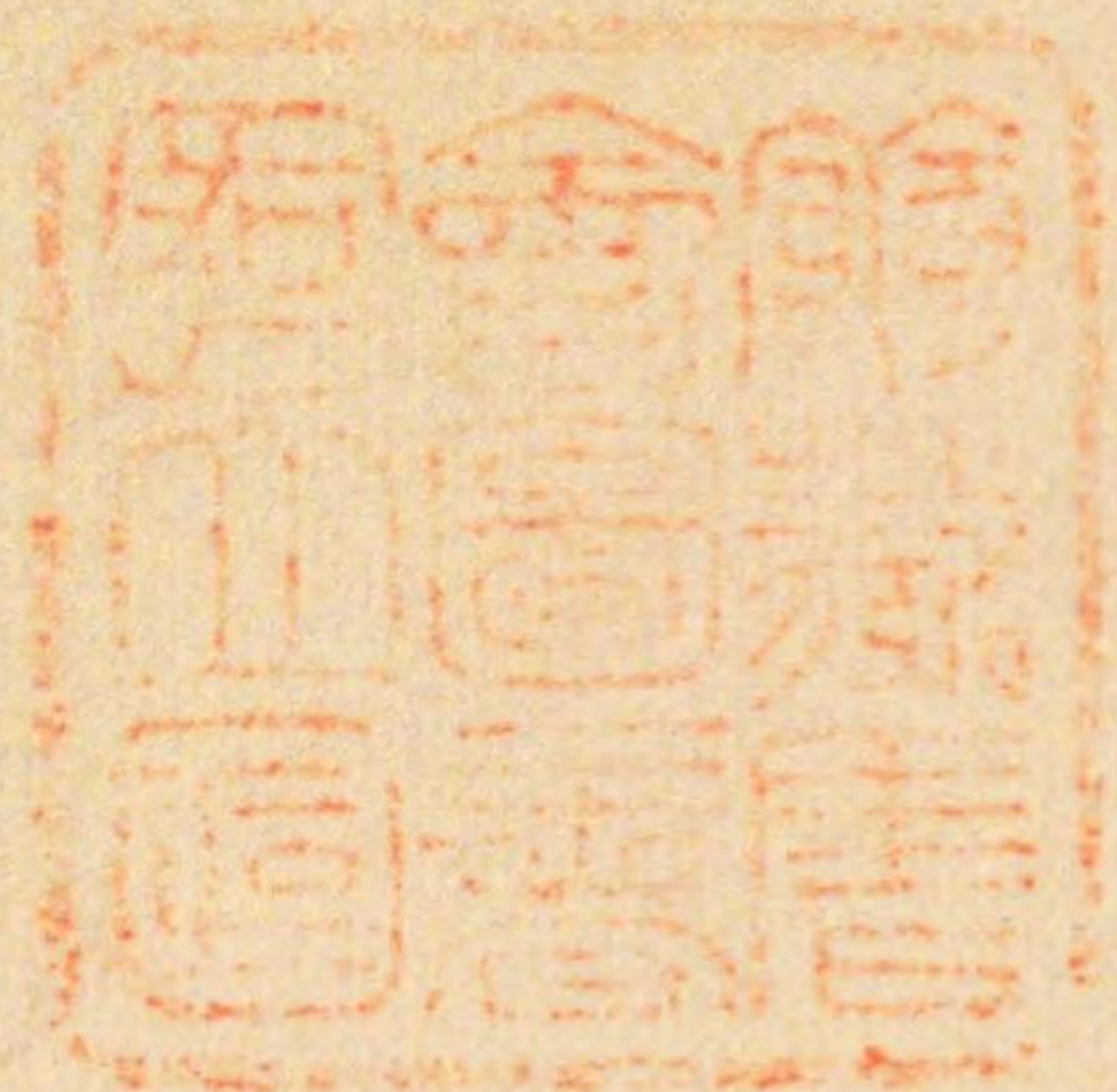


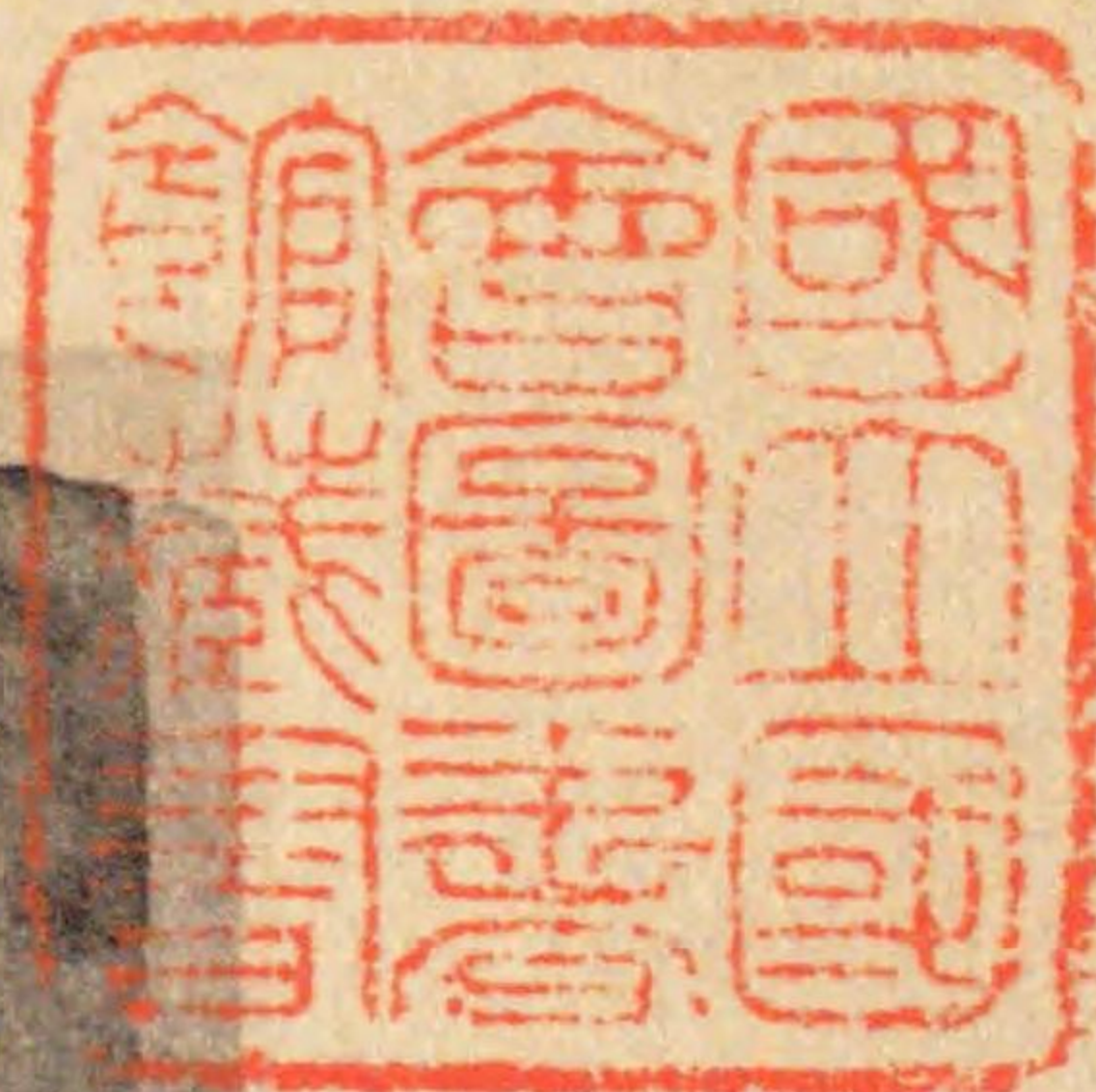
225577

288.42 ~~285~~ II

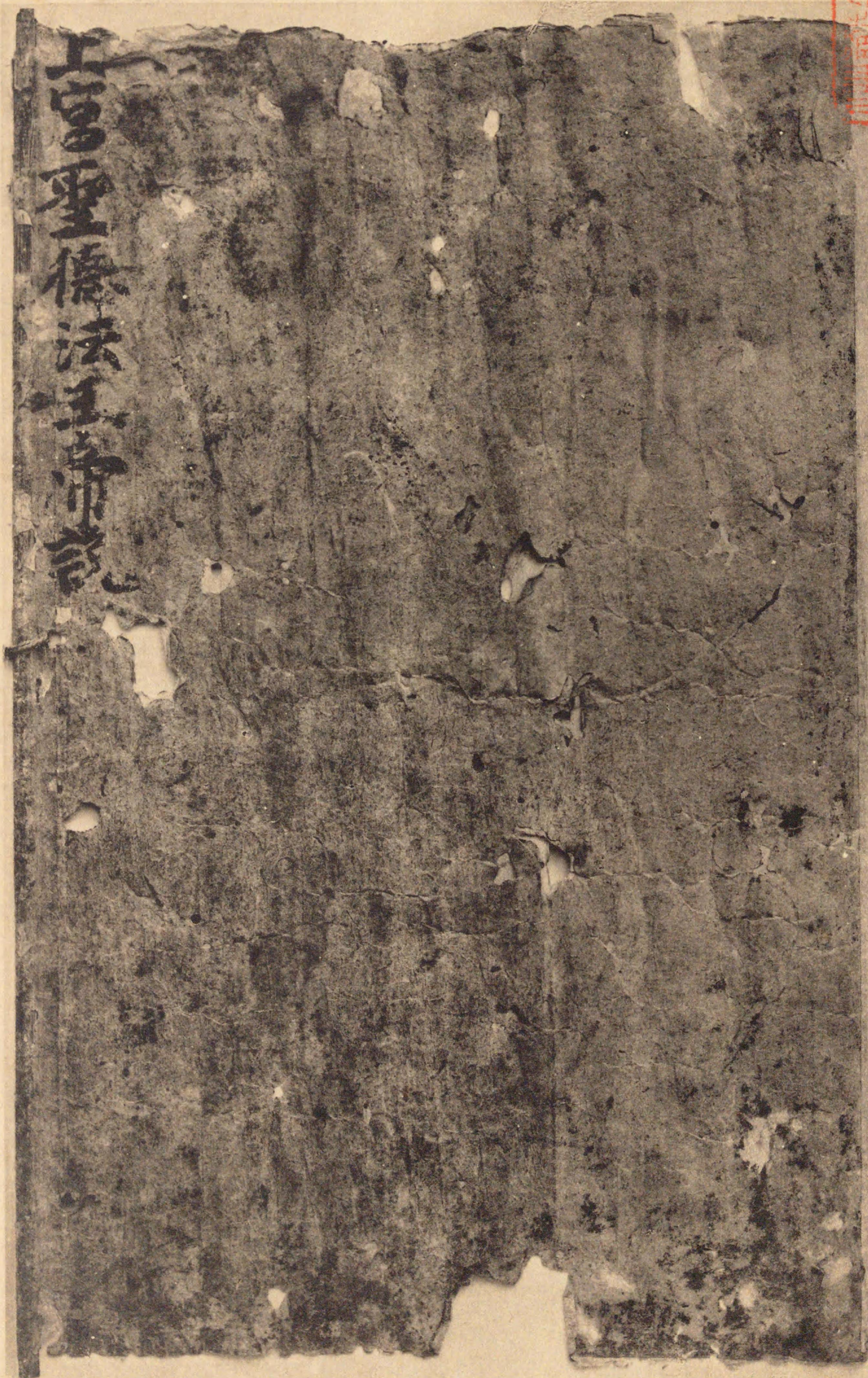
Sy 96/3







上宮聖德法王帝說



上宮聖德法王帝說

伊波礼池邊雙欄宮治天下稱豐日天皇娶度

人王為大后生兒廐人豐聰百聖德法王

蘇我

次久米王 次殖粟王 次茨田王

又天皇娶我伊奈米宿祢大臣女子名伊志支那郎女生兒

多米王 又天皇娶葛木當麻倉首名比里古女子田比十郎女

生兒宇麻呂古王 次須加互古女王

此王亦祭伊勢神前
至千三天皇

合聖王兒

王子也 聖德法王娶膳部多夫古臣女子名菩岐美郎生

兒春米女王 次長谷王 次久波太女王 次波止利女王 次三枝王

次伊止志古王 次麻呂古王 次馬屋古女王 已上八人

又聖王娶我馬古神大臣女子名員古郎女生兒山代大兄王

此王有賢尊志棄身命而愛

此王亦祭伊勢神前

至千三天皇

已上四人

又聖王... 此王有賢尊志棄身命而愛

人民也後人與父聖王相濫昨也

次財王 次日置王 次片置女王

已上四人

又聖王娶尾治王女子位奈部... 生兒白駭部王 次早海女王

合聖王兒十四王子也 山代大兄王娶庶妹春米王生兒難波麻呂古王

次麻呂古王 次弓削王 次佐之女王 次三嶋女王 次甲可王 次尾治王

聖王麻呂多米王其父池邊天皇崩後娶聖王母穴太部間人王

生兒佐爾女王也 祖 斯貴嶋宮治天下阿米久尔於志波魯支廣道

皇 聖王 祖父也 娶檜前天皇女子伊斯比女命生兒他田宮治天下天白王怒

那久良布乃多麻斯支天皇 聖王伯 又娶宗我禰目足大臣女子古

多斯支命生兒伊波利池邊宮治天下橘豐日天白王 聖王 妹少治田

宮治天下止余美氣加志支夜比賣天皇 聖王妹 又娶支多斯比賣

同母弟宇阿尼命生兒倉橋宮治天下長谷部天皇 聖王伯

聖王

姊穴太部間人王聖王母也

右五天皇無雜他人治天下也但倉橋弟四少治田第五也

少治田宮御宇天皇之世上宮鹿戸豐聰可命鳩大臣共輔天下教

而興隆二寶起元興天四皇等寺制爵一二級大德少德大仁少仁大禮

大信小信大義少義大智少智

池邊天皇皇后穴太部間人王出於鹿戶之時忽產上宮王命幼少聰

敏有智至長大之時問人之自言而辨其理又聞一智八故号曰庶

戶豐聰八可命池邊天皇其太子聖德王甚愛念之令住宮南上

大殿故号上宮王也上宮王師高麗慧意法師王命能悟涅槃常

住五種佛性之理明開法苑三車權實二智之趣通達維摩了不思

議解脫之宗且知經部北隆漢多兩家之辨亦知三玄五經之旨並明

天文地理之道即造法苑等經疏七卷号曰上宮御制礼疏太子所問之

義師有所不通太子夜夢見金人來教不解之義太子寤後即能

法苑珠林卷之七十四天皇御制法苑珠林卷之七十四

義師有而不通太子夜高身命者考之

亦以傳於師亦領解如是之事非一二可太子起七寺四天皇寺法隆

寺中宮寺檜寺峰丘寺并彼宮賜池後寺葛木寺賜葛木良

代傳云太子五年秋七月板年四月十五日少治田天皇請上宮王令講勝勝經其儀如僧也諸王公

主及良連公民信受無不嘉也三箇日之內講說訖也天皇布施口上

王物栲磨國捐保郡佐勢地五十町代聖王即以此地為法隆寺地也

今在栲磨田慧慈法師賣上宮那制衣疏還歸本國流傳之關云

三百餘町有

十年二月廿二日夜半聖王薨逝也慧慈法師聞之奉為王命

講經教願日遂上宮聖必歛所化吾慧慈來年二月廿二日死者必

逢聖王面奉淨土遂如其言到明年二月廿二日發病命終也

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午年亡於大玉天皇身

太子而擔願賜我大御病大平欲坐故將藥師像作伴奉詔

當時崩賜造不堪者少治田大宮治天下大王天皇及東宮聖德太子

戶之易而衣欠丁卯年七奉

當時崩賜造不堪者少治田大宮所定大玉天皇及東宮聖德太子
命受賜而歲次丁卯年任奉

右法隆寺金堂坐樂師像光後銘文即寺造始緣由也

法興元世一年歲次辛巳十二月鬼前大后前明年正月廿二日上宮

法王枕病弗愈コノヨカラス干食王后仍以勞疾シテヒシ並着於床時王后王子等及母

同シテ深怖ヒヤ愁毒シ共相敬願ス你依三寶當造釋像尺寸玉身ヒシ蒙

此願力轉病延壽安住世間若是定業以背世者往登淨土早

昇妙果二月廿一日美百王后即世ヨラニ法王登遐美末年三月中如願

敬造釋迦尊像并快侍及莊嚴具竟乘斯徽福信道知

識現在冥隱出生入死隨奉三王紹隆三寶遂共彼併普遍示

道法界含識得脫苦緣同趣菩提使司馬鞍首止利佛力所造

右法隆寺金堂坐釋迦佛光後銘文如件

釋曰法興元世一年此能不知世ト但案帝ト記ト云少治田天皇之世東

宮所定大玉天皇及東宮聖德太子宿跡共平章而達立三寶

我奮我乃止美能并乃美豆伊加奈久尔多義五麻之母乃止美乃并
能美豆是歌者膳夫人卧病而将臨没時乞水然聖王不許遂
夫人卒也即聖王誅而詠是歌即其證也但銘文意顯夫人卒日也
不注聖王薨年月也然諸記文分明云壬午二月廿二日甲戌夜半
上宮聖王薨逝也山出生入死者若其往及所生之辭也三王者若疑神
前太后上宮聖王膳夫人合此三所也 斯歸斯麻宮治天下天皇
名阿来久尔意斯波番友比里尔波乃弥已等娶甚奇大后名伊
奈米是后女名吉多斯比弥乃弥已等為太后生名多至波奈等已
比乃弥已等妹名等已弥居加斯支移比弥乃弥已等娶大后弟
名字阿尼乃弥已等為后生名孔部間人公主斯歸斯麻天皇之
子名斐奈久羅乃布等多麻斯支乃弥已等娶麻妹名乃已弥
居加斯支移比弥乃弥已等為太后坐宇所多宮治天下生名尾治
玉多至波奈等已比乃弥已等娶麻妹名孔部間人公主為太后坐瀆

王多至波奈等已比乃初已言更度外乃子...
邊宮治天下生名等已乃初乃初已等娶尾治大王之女名多至波
奈大女即為后歲在辛巳十二月廿一日癸酉日入孔部間之母王前明年
二月廿二日甲戌夜半太子崩于時多至波奈大女即悲哀嘆息白畏

天之雖恐懷心難止使我大王與母王如期從遊痛酷無比我大王
所告世間虛假唯佛是真玩味其法謂我大王應生於天壽國之中
而彼國之形眼所正者歸回面像欲觀大王往生之狀天皇聞之懷狀
一告曰有一我子所語誠以為然勅諸采女等造繡帷二張畫者東
諸其賢高麗加西溢又漢奴加已利令者棕部奈久麻

右在法隆寺藏繡帷二張從者龜背上文字者也更不知者之
卷奇 獲我世 弥字 或當賣音也 已字 或當余音也 至字 或當知音也

白畏天之者 天即所治而天皇也 太子崩者 即聖王也 從遊者 死也

猶云天可 天皇聞之者 又所治而天皇也 令者 猶監也

白皇天之者

天壽國者

猶云天可

天皇闡之者

又少治由天皇也

令者

猶監也

上宮時臣勢三枝大夫歌

伊加留我乃正美能字何波乃多般婆許當和何於保支美乃新及

和須良穀米

美加祢字須多婆佐美夜麻乃阿遲加氣尔比止乃麻字之志和何

於保支美波母

伊加留我乃已能加支夜麻乃佐可留木乃蘓良奈留許等字

艾美尔麻平佐奈

丁未年六七月蘓我馬子宿祢大臣佐物部室屋大連時大臣軍

士不尅而退故則上宮玉琴四王像達軍士前檣云若得正此大

連奉為四王造寺尊重供養者即軍士得勝取大連訖依此

伊加留我乃正美能字何波乃多般婆許當和何於保支美乃新及

連奉為四王造寺集...

即造難波四天王寺也。聖王生十四年也。

志美嶋天皇御世代午年十月十二日百濟國王明王始奉度也。

像經教并僧等勅授獲我稻目宿祢大臣令興隆也。

庚寅年燒戒佛殿佛像流却於難波堀江治田天皇御世。

丑年五月聖德王与嶋大臣共謀達立佛法更興三寶即准

此行定爵位也七月立十七餘法也。

飛鳥天皇御世美和年十月十四日獲我豐浦乞食大臣兒入藤原

蘇郎坐於伊加香加宮山代大兄及其昆弟等合十五王子等

天皇御世己巳年六月十一日近江天皇生十一年致於林太子

以明日其父豐浦大臣子孫等皆滅之。

志保島天皇台天下卅七年

志歸鳴天皇治天下卅七年

乙代卅二年
丁卯年四月前陵檜前坂合出也

池田天皇治天下十四年

乙巳年
表在、口志

池田天皇治天下三年

丁未年四月前秋七月年葬
河内磯長中尾山陵
或之内志奈我中尾

倉橋天皇治天下四年

壬子年十月前寶為鳴大屋所葬也
陵倉橋出也

小治田天皇治天下卅六年

代子年三月前陵大野出也
或之内志奈我山田寸

上宮聖德法王又云法王壬申年壬午年二月廿二日薨逝也

生卅九年 小治田宮為東宮也

或之内志奈我思也

傳得僧相慶

天



和刀法隆寺勸學院文庫

庚戌春三月沙向度善信、自百濟龜仁橋并寺、今臺津寺也、
楊橋、其寺也、在臺津寺也、

百濟大儿、豐浦大儿、
百濟大儿、豐浦大儿、

惟古于兒、之印信、十年、
惟古于兒、之印信、十年、

法之執儀、身是、
法之執儀、身是、

司馬、
司馬、

度水、
度水、

百濟、
百濟、

美、
美、

三、
三、

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

此書也 卷之三 夜十三日 年九月 卷三十一 日五 日五

知恩院藏上宮聖德法王帝說解説

上宮聖德法王帝説は、現存最古の聖德太子傳にして、記事質實にして信すべく、他に所傳なき異聞舊記を存して正史の闕を補ふべく、上代研究の資料として價値多きものなるは世の周く知る所なり。

京都知恩院所藏の古寫本一卷は、卷子本にして、紙の表紙を附し、紐なく、白木の軸をつけたり。表紙は今は大部分剝落せるが、もとは褐色にして光澤ありしもの如く、左端に竹を込め、表題は「上宮聖德法王帝説」と墨書せり。この表紙は甚古色あれども、或は最初のものならざるべく、表題の文字は、更に後に加へたるもの如し。本文は白楮紙五葉を繼ぎて書寫せるものにして、紙の大きさ、縦八寸八分、横は第一紙一尺六寸五分、第二紙及第三紙一尺六寸九分、第四紙一尺七寸、第五紙七寸六分あり。第五紙の終は天地を斜に截りて軸に附すべくせり。紙に欄界を施さず、行數字數を定めず、天地にもほとんど餘白を剩さず、筆に任せて書したれば、行の方向正しからず、その間隔均一ならざる所多く、紙の繼目に跨れるところあり。この本、破損虫損少からざるを以て、全部に（但、裏書ある部分を除く）裏打を施して修補を加へたるが、裏打の紙は、卷尾に於て、もとの紙よりも五寸二三分長くして、その部分の中央や、左に「和務法隆寺勸學院文庫」と墨書せり。この修補は、江戸時代に加へたるもの如し。

この本、末尾の餘白の中央に本文とは別筆にて「傳傳僧相慶之」とありて古く僧相慶の手に在りし事を示せり。相慶は、法隆寺所藏大般若經の跋に「長寛二年^甲八月六日酉時書寫畢法隆寺之五師大法師相慶之」と見ゆる相慶と同人なるべく、さすれば法隆寺の僧にして平安朝の末に世に在りし人なり。この相慶の筆蹟の右下に淡墨にて草名を署せるあり。いまだ何人なるかを詳にせざれども、これ亦この本の舊藏者たりしこと疑なく、その書風より觀れば、平安朝の人なるべく想はる。相慶との年代の前後は未だ確實ならざれども、名を署せる位置よりすれば、相慶よりも前なるが如し。この草名の左に紙端に接して二つの朱印あり。一は「欣賞」、一は「徹定珍藏」とあり。これ共に鶴飼徹定の印にして、この本その儲藏に屬せしを知るべし。徹定は、知恩院の貫主たり、幕末より明治にかけて古寫經の蒐集につとめ、古經題跋等の著あり。古寫本を模刻せし事も少からず。この本卷頭内題の下方にも亦三個の朱印あり。「古經堂藏」「法隆學問寺」及「勸學院經藏印」の文あり。古經堂は即徹定にして、勸學院は法隆寺中の一院なり。かくてこの本は、古く法隆寺の住侶に傳はりしが、後法隆寺勸學院の文庫に入り、その後（明治維新の頃か）寺門を出でて徹定師の藏に歸し、その寂後、知恩院の所藏となりしものなるべし。猶、この本卷頭の紙端下方に、淡墨の文字の殘缺の如きもの見ゆるは、其の形、卷末の草名に似たるものあるを以て想へば、かの草名を署せる人、この本文第一紙と表紙との縫際にも自己の名を署したるにあらずやと想はる。この本は明治三十六年四月國寶に指定せられたり。

この本書寫の年代は明ならざれども、書風字體等より觀れば平安朝中期を下らざるものなるが如し。而して、本文の傍に附せる假名はハワ（母）オチ（叔伯）オサタ（乎沙多）ヲホ（大）の如き假名遣の誤あれど、字形古體を存し、本文と同時にあらずとも、甚しく年代を異にせるものにはあざざるべし。又、處々に墨にて文字を訂し又は書加へたるところあり。多くは字傍の假名と同筆なるが如しと雖、まゝ別筆とおもはるゝも混ぜり。全文に施せる句讀點返點連讀符は假名と同時にものと認めらる。又、破損の爲缺けたる文字を補へる所あり。複製本第一張裏第二行の終に妹穴穗部間の五字を補へるは、その文字甚古く見ゆ。複製本第一張裏第八行末の生の字、第二張表面第二行末の手島女王の四字、第二張裏第十二行末の之の字の下半、第六張裏第三行の細註右行の崩の字の下半以下、及同左行の陵の字などは破損せる箇所に紙を補ひてその上に書せるものにして、これらは後世のものなるが如し。猶、破損磨滅塗抹等によりて文字のまぎらはしきものを擧ぐれば、複製本第一張裏第二行の終の破れたる箇所の右の縁にはマイアナの假名、半缺けて半存せり。同第三行聰の字の右にはサトの字あり。同第六行倉の右にクあり。第二張裏第三行最後の字はもと岐なりしを政に改めたり。第三張裏第八行最初の昇の右はシメ上なり。第五張裏第八行第五字は、もと尔と書きて乎と改めたるなり。第六張裏第一行治天下の下は卅一とありしを墨を加へて消せるなり。

この本第四紙の紙背に裏書あり。複製本第五張表第八行より第六張表第三行にいたる十八行の裏面にありて、全部一筆にして本文とは筆蹟を異にせり。中に「承暦二年戊午南一房寫之眞曜之本」と見えて、承暦二年に書寫せる書より引用せる文ありと想はるれば、それより後のものなる事明なれど、猶平安朝を下らざるものなるが如く、本文に淡墨にて間々書入を加へたと同人の筆ならんか。この裏書の部分は裏打を施さざれども、上下兩端に紙を加へて修理したれば、紙端の文字の隠れたるあり。複製本裏書の部裏面第五行と第六行との間の最上端に存する日の字の如きは、全く隠れて見る事を得ず。

本書は奈良朝以前の舊記古傳によりて編述せるものにして、記紀の傳へざる所を傳へたるのみならず、また之と所傳を異にし、しかも上宮記元興寺緣起等極めて古き記録と一致するものあれば、古代史研究には缺くべからざる資料たり。且又、天壽國曼陀羅銘、三枝大夫の歌など、推古時代の文章歌謡のこの書によりてはじめて知らるるものありて、古文學研究の資料としても尊重すべきものなり。而して、今世に傳はれる諸本としては、群書類従本あり、狩谷棧齋の考證を加へたる證註本あり。平子尙の棧齋の書に更に校註を補へる補校證註本あり。これ等諸本の根源は何れも法隆寺本たりと推知せらる。されば、この知恩院所藏本は現行諸本の原本といふべきなり。而してこれ等の諸本何れも原本と多少の相違あるは、春日政治氏が諸本と對校せられし校訂法王帝説によつても明なりとす。その中、原本と差ふ所最多きは類從本にして、棧齋本之につき、平子本は最原本に近けれども、猶意を以て改めたる所あり、又多少の誤脱あるを免れず。春日氏の本は、直に原寫本より謄寫せるものなれども、謄寫版を以て印刷したれば、猶あがぬふしなきにあらず。殊に原本の字形曖昧にして讀解に異説あるべきものに於て然り。又本文に附せる假名の如きは、諸本或は之を省き或は之を改めて、一も原形を傳ふるものなし。その全部を寫眞版とし、原本の面目をさながら傳ふるは、今回を以て最初とす（佐佐木信綱氏所藏の古筆切に法王帝説の斷簡あり。平安朝末又は鎌倉初期の書寫なるべく、本書の一異本として觀るべきものなれど、今僅に二行を存するに過ぎざるを遺憾とす。今存するは、本會複製本第五張表第一行最後の「波」より次行の「孔部間人」に至る部分にして、この斷簡には「廿一」の下「日」なく、すべて二十四字なり）。

今、知恩院藏本を本會にて複製するに當り、すべて實大に撮影し、本文は勿論、用紙空白の部もことごとく收めたれども、巻尾の、裏打の紙のみの部分は、之に存する文字のみを出して、白紙の部分は省略せり。裏書は別に撮影して、最後に附せり。

昭和三年四月五日

橋 本 進 吉

昭和三年四月廿五日印刷
昭和三年四月廿八日發行
(非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

東京市下谷區上野公園東側

右代表者 七條愷

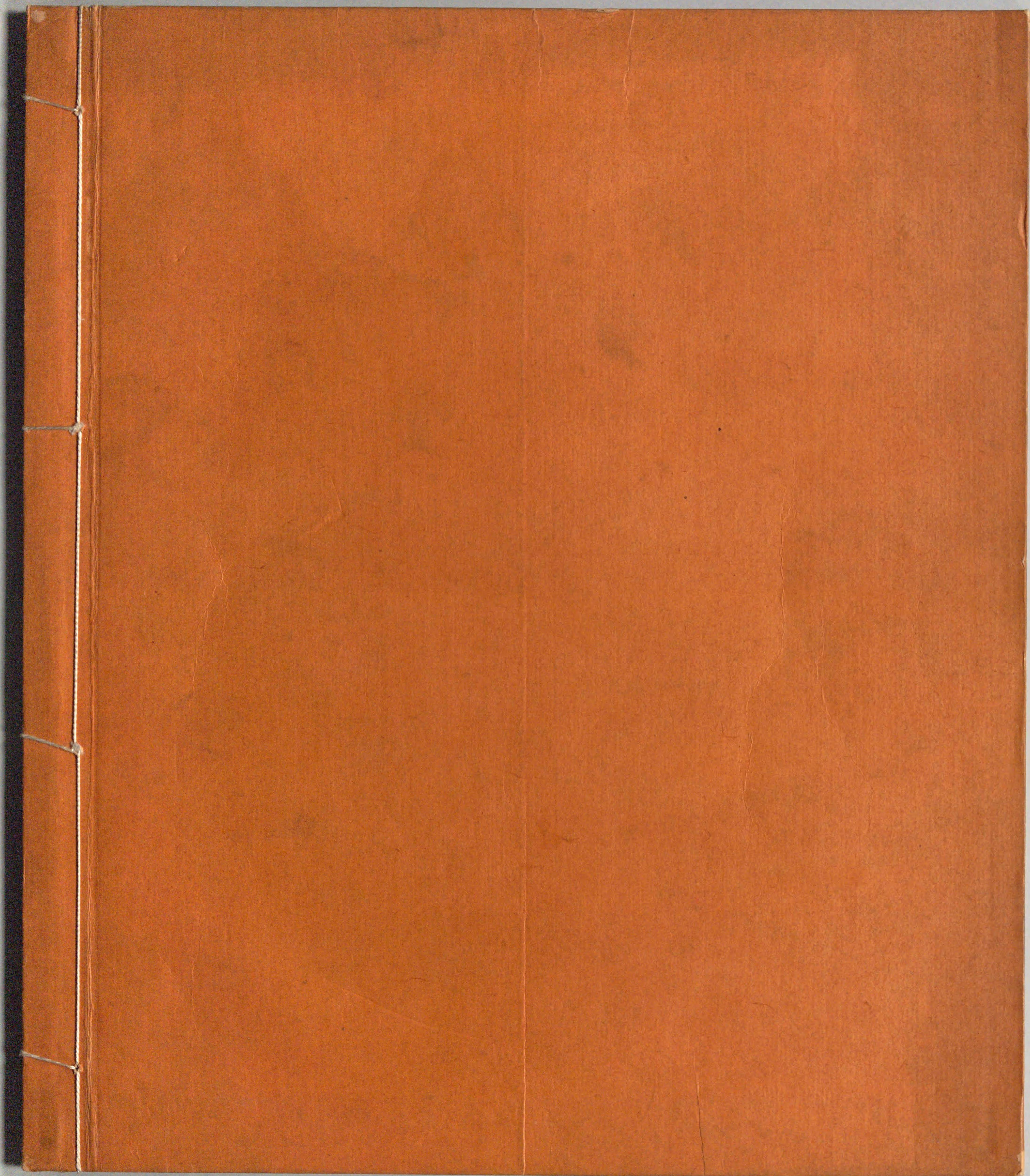
東京市神田區花房町四番地

印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區花房町四番地

古典保存會事務所

電話下谷六七八八番
振替口座東京四四九四八番



288.42-Sy961z



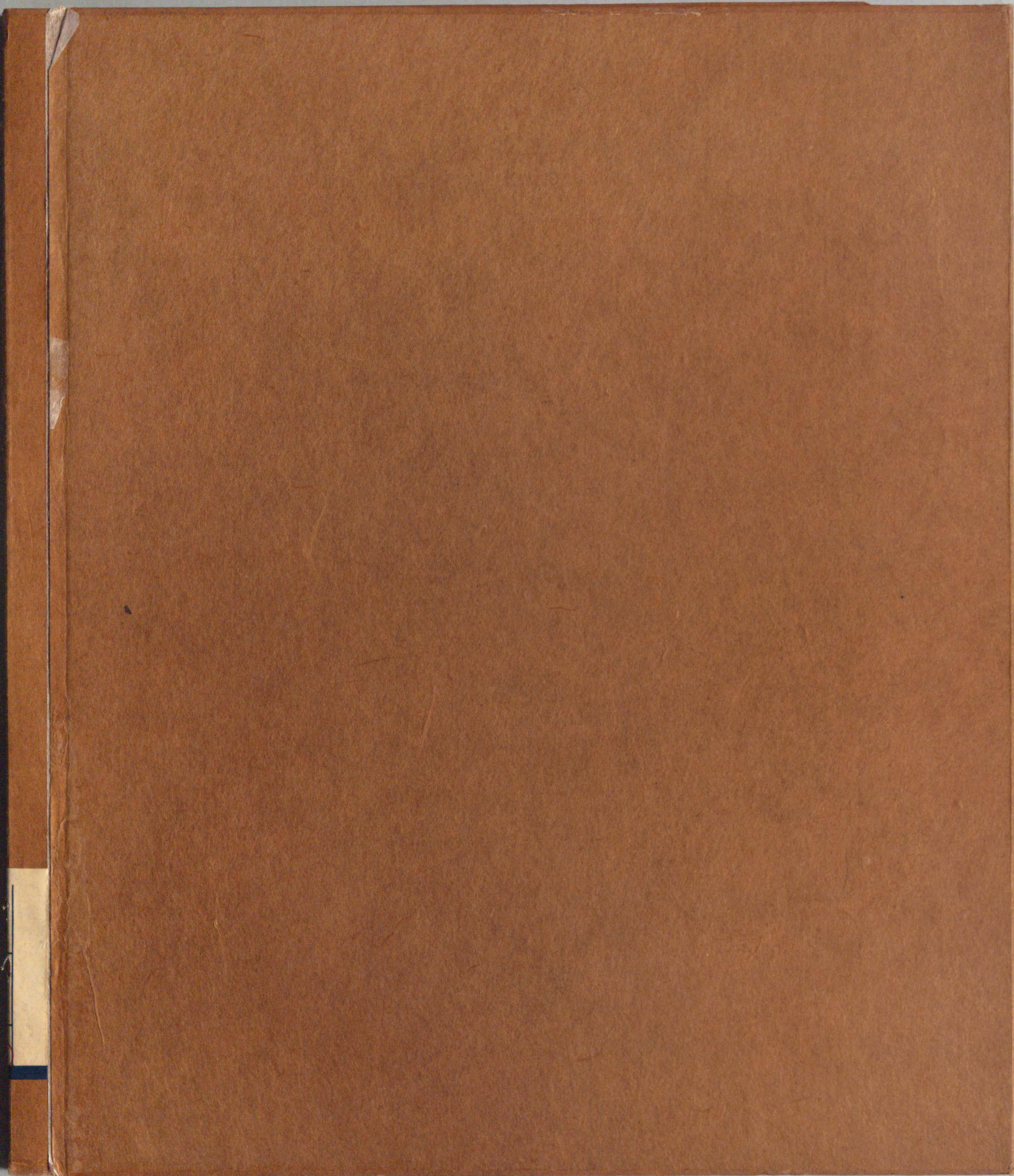
1200600679961

288.42

Sy961z

II (W)

上宮聖德法王帝說

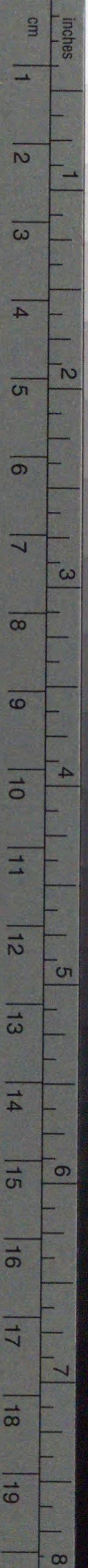


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18